

## Stage9

### Treasure Hunt

#### 宝さがし

作・クリス・ポーリング

絵・ジョン・スチュアート

#### <読むまえに>

お子さんが読むまえに、この本についてお子さんと話すといいでしょう。

- ・表紙と裏表紙を見ましょう。この本にどんなことが書かれているかヒントがみつかります。
  - ・宝さがしがどんなもので、何をしなければならないか、手がかりはどんなものであるかを話しましょう。
  - ・2 ページを開いて、この本の登場人物を確認してください。
  - ・3 ページを開いて、ハチについて話しましょう。どんなずがたをしていて、どんなものを食べて、どうやって刺すのでしょうか？
  - ・このお話の登場人物たちに、どんなことが起こると思うか、お子さんにたずねましょう。
- 自分のスピードでこの本を読めばいいよと、お子さんにいってあげましょう。

#### <ひっかかることば>

ここにあげるのは、お子さんがこの本を読むときにひっかかりそうなことばです。

treasure 宝物

candyfloss 綿菓子

telescope 望遠鏡

cutlass 短剣

ache 痛む

knees ひざ

wasps ハチ

favourite お気に入り

[p. 1]

宝さがし

作・クリス・ポーリング

絵・ジョン・スチュアート

[p.2]

このおはなしにでてくる人

マックス

キャット

アント

タイガー

ジョーンズ先生

ルーシー

[p.3]

もうひとつ、やはりこのおはなしにでてくるのは……

ハチは尻尾のところに針をもっています。ハチは自分たちを守るためにその針を使います。人を刺すこともあるので、要注意です！ 刺されると痛いこともあります、たいていの場合危険はありません。

ハチはくだものやジャム、チョコレートのような甘いものが好きです。

<羽>

<針>

<腹部>

<頭部>

<胸部>

<触覚>

[p.4]

1章——手がかり

学校で海賊祭りが行われる日のことでした。ジョーンズ先生は、宝さがしの準備をしていました。はしゃいでいる海賊たちの一群が、先生のまわりで押し合いへしあいしていました。

「海賊のおきてを忘れちゃだめよ」と先生は言いながら、第1のヒントが書かれた紙を配りました。

「海賊たちはみんなで戦利品を山分けしないとイケないんだからね」

[p.5]

<次の手がかりを見つけるために

次のようにせよ

東へ進め

そこでは、子どもたちは大いに飲み食いできるであろう>

<オウムのしっぽ福笑い>

[p.6]

「山分け？」キャットが言いました。「でもまずは宝ものを見つけなくちゃ！」

「永遠に時間がかかるよ」タイガーがブツブツ言いました。「これ、次の手がかりを見つけるための手の手がかりじゃないか！」

<宝探し>

[p.7]

「それに、ジョーンズ先生が仕掛けた謎を解くには、頭がよくなくちゃだめよね」という声がありました。マックス、キャット、アント、タイガーは不愉快そうにうなりました。声の主はルーシーでした。

「ということで、勝つのはわたしね」とルーシーは高らかに言いました。「わたしはこの中でいちばん頭のいい海賊だもの」

ルーシーは見せびらかすときにいつもやるように、金色の巻き毛を振ってみせました。そして次の手がかりを探すために、すたすたと行ってしまいました。

[p.8]

キャットは綿菓子をかじりました。「ルーシーは宝ものを山分けしたりしないわ」キャットは言いました。「きっと全部ひとりじめにするわよ」

「ルーシーがいちばん先に見つけたらの話だけだね」マックスは言いました。マックスは望遠鏡で何かを発見しました。

[p.9]

「手がかりはもうどうでもいい」マックスはそう言って、校庭の向こうを指さしました。「宝ものの隠し場所が、正確にわかった気がする……」

[p.10]

2章——砂の中

[p.11]

「砂場かい？」アントが言いました。

「本当か、マックス？」タイガーがたずねました。

「ちょっと宝島みたいだね」キャットが言いました。キャットは腕時計についている望遠鏡で見ました。

「ジョーンズ先生は、はじめるときにみんなを反対の方向に行かせたんだよ！」マックスは言いました。

[p.12]

ほかの海賊たちは手がかりを探すのに夢中でした。マックス、キャット、アント、タイガーはさっさと砂場へと向かいました。

「見て！」キャットが声をあげました。キャットは砂についた大きなXのかたちを指さしました。マックスは正しかったのです。

「さて、次はどうする？」アントがたずねました。

「掘るのさ、もちろん」マックスは言いました。

「だれかに見られたら？」キャットが言いました。

「そうだよ、ルーシーみたいなやつにさ」タイガーが文句をつけました。

[p.13]

マックスは仲間たちを見て、ニコツとしました。キャットは食べかけの綿菓子の棒を砂に突きさしました。4人の仲間たちは腕時計のダイヤルを回して……

[p.14]

マイクロレンズは砂を掘りはじめました。小さな海賊の短剣しか持っていなかったのも、たやすくはありませんでした。タイガーは、アイスクリームのスプーンをもってきてたらな、と思いました。まもなく、みんな腕が痛くなってきました。

と、そのとき、アントの短剣が固いものにあたりました。

<ここだ！>

[p.15]

「こっちだ！」とアントは叫びました。「宝ものだよ！」

4人は全員ひざをつきました。金色の光るものが見えます。よろこびのおたけびをあげながら、4人は砂をすくいました。

[p.16]

3章——攻撃だ！

そのとき、タイガーが掘る手を止めました。「あの音、聞こえる？」タイガーはたずねました。

「何が？」マックスは言って、さらに砂を掘りました。

[p.17]

空中でブンブンという音がしました。マイクロフレンズは掘るのをやめて、顔を上げました。黒い影が頭上をかすめました。ブンブンという音は、ますます大きくなってきます。

タイガーは恐怖で凍りつきました。マックスは血の気が引きました。キャットは悲鳴を上げました。アントの口から短いことばがひとつこぼれました。それは……「ハチだ！」でした。

マックスは 1 匹のハチに向かって短剣を振りました。それはハチを怒らせたただけでした。他のハチがスピードを上げて向かってきました。

[p.18]

「あいつらは何を狙っているんだ？」タイガーがわめきました。

「わたしの綿菓子だわ！」キャットが叫びました。「ハチはわたしの綿菓子を狙っているのよ！ みんなはここにいて。わたしが追っ払うから」

[p.19]

キャットは綿菓子の棒をつかみました。それを頭の上にかざすと、全速力で砂場を走りました。ハチはブンブンと興奮してルーシーのあとを追いました。砂場の反対側につくと、キャットは思いっきり力をこめて、棒を投げました。綿菓子の棒はやり投げのように空を飛んでいきました。ハチは綿菓子のまわりに群がりました。

[p.20]

4 章——宝ものだ！

キャットは戻ると、びっくりして息をのみました。マックスとアントとタイガーはニッコリ笑っています。金貨が砂の上にあふれ、1 枚 1 枚、太陽の光のように輝いていたのです。

「チョコレートのコインだよ」タイガーが言いました。「こんなにたくさんある！」

[p.21]

「海賊のおきてを忘れちゃダメだぞ」マックスが言いました。「戦利品は山分けしなくちゃいけない」

4 人はそれぞれ 1 枚ずつコインをとって、砂の上をタイヤみたいに転がしていきました。

砂場のふちをよじ登って外に出たとき、大きな影が頭の上に突然現れました。

[p.22-23]

ルーシーが砂場をのぞきこみました。目が光っています。

「宝ものだ！」彼女は満足げにながめました。「ぜんぶわたしのものだわ！」

ルーシーは手のひらいっぱいコインをつかむと、ひとつ破って開けました。「わたしの好物ね」ルーシーはそう言って、甘いチョコレートの香りを嗅ぎました。

そのとき、彼女は耳にしました——ブンブンという大きな音を……

[p.24]

「たすけて！」とルーシーは叫びました。ハチがまわりに群がってきます。ルーシーはコインをしっかりと手に握ったまま走って逃げました。ハチはルーシーのあとを追いかけてきました。

ほかの海賊たちが砂場にやってきたとき、砂場にはみんなの分の宝ものがありました。

「お宝をぜんぶ分けてくれるなんて、ルーシーはなんていいやつなんだろう」海賊たちは口々に言いました。

<読んだあとで>

読んだあとで、この本についてお子さんと話しましょう。こんな質問をしてみましょう：

- ・子どもたちは、どうしてルーシーより先に海賊の宝ものを手に入れたかったのだろうか？
- ・キャットはどのようにして、ほかのなかまをハチの攻撃から救ったかな？
- ・海賊の宝ものって何だったっけ？
- ・この本は気に入った？ その理由は？

この話をまた読んでみようとお子さんにすすめてください。読む自信をそだて、つかえずに読めるようになります。

<ほかにすること>

海賊をテーマにして、おもしろいことがたくさんできます！ 自分たちの海賊の宝さがしを考えてみてはいかがですか？

この本のシリーズの Pirates と Blackbeard's Ship という2冊の本を読めば、海賊や海賊船について、もっといろいろなことがわかります。あるいは、図書館から本を借りたり、インターネットを使ったりしてもいいかもしれません。